



## 根の営み

東京大学アジア生物資源環境研究センター

鴨下 顕彦

「根の研究」と言えるかわからないが、いろいろな種類の作物を、根や茎や葉に分けて窒素の分配と利用効率を測定したのが、私の最初の根に関する実験であった。今から20年以上前、農学系の修士課程の大学院生であった。その当時聞かされた言葉で今でも頭に残っているのは、「根の営みが大切である」という言葉だ。

高橋三郎(1920-2010年)という名前を、植物の根の研究者でご存知の方は多くないかもしれない。高橋先生は東京大学の工学部を卒業し、戦後、教養学部の大学院を修了され、1960年代からの半世紀近くをキリスト教の伝道者として歩まれた方である。それは、筆者の関係する分野においても、激変・激動の時代であった一敗戦からの復興、貨幣経済優先の風潮の中、農業所得は相対的に低下し農村人口は減少し、食生活における急速な肉食化が進み、食糧自給率が低下した。大学生の政治意識が先鋭化した時代から無関心の時代へと変わり、家庭や学校での教育機能の崩壊が危惧される事態も生じてきた。学術や研究の国際交流が活発になりながらも、戦争やテロリズムは絶えず、国家間の緊張は解けないままである。高橋先生は伝道者として、人間にとって本当に大切な事柄は何かを探求され、拠り所となる言葉を多く書き残し、移りゆく時代の中を生きていく後進を励まされた。そして3月11日の大震災の8か月余りに先生の生涯は閉じられた。

筆者は大学時代に高橋氏の警咳に接した。「根の営みが大切ですね」と迷いなく静かに力強く語られる在りし日の先生の姿を思い出す。すぐに目立った成果を出そうとするのではなく、人の目にはつかなくてもいいので若い時に自他の人生を根底から支えうる存在を探せ、という意味ではないかと思う。

昨今、人目に隠れた営みや働きの意義を直言するような人格と若い世代が出会うことは、ますます稀になってきている。明日までにしなくてはいけないこと、今週いっぱい締め切り、決まった時期に取らなくてはならない就職内定、半年あるいは3年以内に書かなくてはならない論文・・・そういった目に見えるアウトプットのために齟齬(そご)しなくてはならない時代の流れがあり、外的な流れにいかにも上手に乗ってゆくかで個人の価値が決まってゆくような雰囲気、若い世代にも、年配の世代にもあるように思う。大学における学生教育の現場でも、成果優先の指導になることも少なくない。

そのような状況でどうすればよいのか？時間内に役割を果たすことや成果を出すことが必要ではないというのではない。良い意味での競争や成長のための切磋琢磨はよいものである。しかし人格のない「成果」主義だけになると容易ではない。1つの勧めは、身近な人間関係への気配りや助け合いだろう。もう1つは、対人、対社会的な対応をひとまず置いておいて、自分を大切にすること、自分の尊厳や限界をよく理解すること、言い換えると、「根の営み」を大切にすることではないかと思う。無二の役割を持った個として、責任の主体として1年、2年、10年、20年と生きてゆく。時が来れば、世界に1つだけの花、自分にふさわしい花を咲かせ、実を結ぶことができることだろう。自分と、他者と、自然界とに責任を持って仕事をする。本研究会の場合、FFP(捏造・改竄・盗用)の防止など学術上の倫理的なルールを守ることも含まれる。そのようにして、新しい時の訪れを待ち望むことができるのだろう。

根の研究会には、なんとなく自由な雰囲気、若手の参加、植物の根に関する多様な研究情報など、20年近くにわたって、発起人や中心になって労わられてきた方々の努力の賜物があるように思う。会の良さが継承され発展してゆくことを願いたい。